

藩祖 酒井忠勝

江戸時代、大名は領知を治める統治者であると同時に、家格に見合う文化人としての器量を備える必要がありました。彼らは、刀剣や書画、茶道具など、優れた美術工芸品を多く求めました。茶会や歌会の催行など、大名同士で交流を図る

庄内藩主酒井家も同様に、歴代の藩主は貴重な美術品を多く所有していました。酒井家文書中に残る「数寄屋帳（茶道具などの目録）」や「腰物帳（刀剣の目録）」などを見ると、現在伝来していない数々の貴重な美術品も多く記載されています。江戸時代中期に8代将軍徳川吉宗の命により、刀剣鑑定などを職とする本阿弥家が提出した「名物帳」に記載されているためです。短刀の中ではやや大振りの類に属し、美しい地鉄によく冴えた刃文は気品があり、同作の中では「地刃」が健

忠勝が愛でた名品

ことも多く、良い関係を築くために贈答品として美術品を利用することもありました。

3代忠勝は歴代藩主の中でも、特に多くの名品を求めています。現在の国の重要文化財に指定されている「短刀銘吉光（名物信濃藤四郎）」や「潮音堂の掛け軸も忠勝が購入したものです。

吉光は鎌倉時代後期の山城国（京都）粟田口派の名工で、古今通じて「短刀の名手」と称されています。号にある「信濃藤四郎」とは、元の所有者・永井信濃守尚政の官途名に由来し、「名物」と冠されているの

全です。短刀の表裏に護摩箸の彫り物があります。なお、「名物帳」には274口の名刀が記載され、特に正宗・吉光・郷義弘（この三人の作刀を「天下三作」と称します）が4割を占めます。また、「信濃藤四郎」の代付け（評価額）は金500枚（大判500枚）で、購入額は小判3255両になっています。



重要文化財・短刀銘吉光（名物信濃藤四郎）

重要文化財・短刀銘吉光（名物信濃藤四郎）

倉時代末期



「一字千金」の逸話で有名な「潮音堂」の掛け軸は、元は小堀遠州が所持していたものでした。忠勝は小堀の茶席に招かれたとき、こ

の掛け軸に一目惚れし、無断で持って行き、家臣に3000両を届けさせたといわれています。中国・南宋代の高僧・無準師範が揮毫した名品です。

庄内に入部したばかりの忠勝の頃は石高も増え、財的に余裕があったため多くの名品を入手出来たのでしよう。他にも現在本間美問堂

「酒井家のお宝」として今に伝えられており、本展で展示紹介しています。

（致道博物館学芸部長・本間豊）



重要文化財・禅院額字「潮音堂」無準師範筆

南宋時代